
あなたのために

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたのために

【Nコード】

N5897B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

バレンタインの日、佐藤刑事にチョコを渡そうとする恋敵を思わず手助けしてしまう心優しい刑事たちのお話。

2月17日

バレンタインの狂想曲も終わった、本庁前。

高木は高野と一緒にだった。

本来は、佐藤と一緒にの仕事のはずだった。

しかし、佐藤は、バレンタイン前の、あれこれのおかげで提出すべき書類仕事がたまっていた。

そのため、目暮警部の厳命により、本日は、籠の鳥となって、書類製作に勤しむ事になった。

そして、高木は佐藤の代わりに高野と仕事をする事になったのだ。

外での仕事は、高木も好きなのだが、

高野からの言い知れぬ圧力が、高木の神経を消耗させた。

やっと、本庁に戻れたのがうれしく、高木は、建物を眺めた。

と、本庁の前を、いつたり来たりしている不審な人影に気がついた。高野も、同時に気がついたようだった。

「おい、あれ、ホワイトダックの姉ちゃんじゃねえか？」

手に何か握っている。

どうやら、小さな箱らしい。

「もしかして、佐藤さんにチョコレート？」

高木と高野は、顔を見合わせた。

本庁前近くのコンビニ「ホワイトダック」。

1課の刑事たちは、そこをよく利用していた。

3ヶ月ほど前から、その女性、佐保は夜のアルバイトとして働いていた。

生まれつきらしい、赤茶けた髪。

あまりにも痩せすぎた体。

肌の色は白いものの、それを台無しにしている顔を覆うそばかす。

客商売には向いていない、かすれた小さな声。

レジや店内で、出会ったたびに、店長や他のバイトもしくは客に嫌味を言われていた。

ある時、高木は佐藤と夜食の買出しのくじにあたった。

その時、高野も、「今日の占いでは、自分はコンビニに行くと言いが向く」

という理由をつけて二人に同行した。

そのとんでもない理由に、異を唱える１課の人間は誰一人としていなかった。

高木は、高野が、そばにいるおかげで、

佐藤から離れた位置にある商品を見ることを余儀なくされた。

その時に二人は、見てしまったのだ。

佐保が、佐藤がいなくなってから、佐藤がいったん手にして棚に戻した物を、

触れれば、消えてしまうものでも触るようにそつと両手で包み込んだのを。

二人は、思わずお互いを見た。

その行為が意味する事が、二人にはあまりにも明白過ぎた。その気配に気づいて、佐保は振り返り、顔面を朱に染めた。

慌てて走り出した彼女は、戻ってきた佐藤に激突し、頭を、何度も下げた。

佐藤は何か、佐保に話し掛けている。

知らない仲ではなさそうだ。

佐保は佐藤に微笑みかけると、レジの方に小走りで去った。

「美和子ちゃん、あの子？」

高野の問いに佐藤は答えた。

「なかなか、人に慣れないのね。あの子。

バイト始めたばかりの頃、タチの悪い客に絡まれててね、助けてあげた事があるのよ。

時々話すんだけど、いい子よ。

お菓子作りの職人になりたくて、昼は学校行ってるんだって。学費稼ぎのバイトをする時間が、この時間しかないから、あまり自分向きじゃないと思うけど、ここで働いてるって言うていたわ」

佐藤の彼女を見る眼は、けなげにがんばる女性を、後輩として応援する先輩の目だった。

そして今日、彼女は、本庁前にいる。

「告白・・・すんのかな」

高野がつぶやいた。

「どうでしょう？ 僕ら」

「どうしましうって、う・・・」

高野も、高木も黙り込んだ。

あの時の切なげな彼女を、思い出せば、恋敵であろうと男として、ほうっておくわけにも行かなかった。二人は、何も考えの無いまま、佐保に声をかけた。彼女は、文字どおり飛び上がって驚いた。

「美和ちゃん、今日は、外にでてこれねえぜ。」

書類仕事貯めちまって、上司に絞られてるんだ」

高野の言葉に、佐保は、二人をまっすぐ見つめた。

「お二人は、佐藤さんの同僚の刑事さん、ですよ。」

そして、私の気持ち・・・わかっておられますね。あの時」

二人は、思わず佐保の視線から目をそらした。

佐保はかまわず言葉を続けた。

「もし、私が佐藤さんにチョコをあげたら、

佐藤さん、私の気持ちをわかってくれると思いますか？」

その言葉に高野は首を横に振った。

「美和ちゃんは、常識的な人間だからなあ」

ため息のような声だった。

高木は、佐保の顔を見て驚いた。

彼女は微笑んでいた。

「そうでしょうね。これで安心してチョコを渡せます」

「で、でも佐保さん、気持ちを伝えたくてここに来たんでしょう?」

高木の言葉に佐保は頷いた。

「でも、もし佐藤さんが私の気持ちに気がいたら、きっと私を傷つけまいとして悩むと思います。

私の気持ちはこのチョコの中にあります。

ただ佐藤さんがこのチョコを受け取って、喜んでくれればそれで良いんです」

「でもなあ、それだけで本当にいいのか?」

高野がうめいた。

消え入りそうな、佐保を見ると、

何とかしてやりたくなってしまうのは高木も一緒だった。

「本当にいいんですよ。

好きな人が、私を好きになってくれれば、それはうれしいですけど、でも、その人にとって、もっと幸せな事があるのなら、そちらを迷うことなく選んで欲しいんです。

それが私の一番の幸せですから」

「皆が、あんたみたいに思ってくれたら、

俺達の仕事は大分減るだろうな」

独り言のように高野はつぶやいた。

高野の気持ちは高木にもよくわかった。

高木にしても、血を手に染めた人々の同じような言葉を何度も聞いた。

『アイシテタノニ、ドウシテ、ジブンヲ、スキニナツテクレナカツ
タノ』

『ダレニモワタサナイ』

高木は、暗い想いを振り払おうと携帯を取り出した。

「おい、もしかして美和ちゃん呼び出す気か?」

「いけませんか?」

「オレに任せろ。おめえが呼び出したんじゃあ、美和ちゃん出て来れねえぜ。」

邪魔が入るからな、絶対。

「……あ、白鳥か？今、下にいるんだが、美和ちゃんに面会だ。美和ちゃんを玄関まで下ろしてくれ。」

え？ダメだア。

だが、本人がそっちに行きたくねえって言うんだからな。

「……あのなあ、いくらオレでも、美和ちゃんが、仕事をおっぱらかして、逃げるのを手伝うわけなかるう？書き物で煮詰まって逃亡のすきを狙ってる？」

白鳥イ、オレが、何年刑事やってると思ってるんだ。

バックレようとしたら、オレが責任もって確保してやるよ」

ややあつて、佐藤が不思議そうな顔をして降りてきた。

高野と、高木にはさまれた佐保を見つけると心配した表情になって駆け寄った。

「佐保さん、何か困った事でも起きたの？」

「佐藤さん、私、学校の留学試験に受かったんです。」

それで、今晚パリに発つことになりました。

期間は一年ですが、認められれば、もっと修業できるそうなので、私、がんばってみるつもりです」

佐藤は、佐保の両手を握り締めた。

「よかったじゃない！すごいわ！おめでとう！」

佐保の顔は、信号機よりも赤くなった。

「そ、それで、アの、わ、わた私のつくった・・

作ったチョコを佐藤さんに、

食べていただけたら・・と」

佐保は顔を伏せたまま小さな箱を差し出した。

「ありがとう。うれしいわ。向こうでもがんばってね」

そう言つて、去ろうとする佐藤の気配を感じた高木は、佐藤の行く手をさりげなく遮りながら、高野に話し掛けた。

「高野さん、将来のプロの作ったチョコレートって見てみたいですよ
ね」

「おう、美和ちゃん。ぜひ開けて見てくれよ」

高野も、高木と同じように佐藤の行く手を・・・

ただ、そのかもし出す風情のため

高木ほど「さりげ」ないことは無かったが、・・・遮っていた。

その二人を、不審げに見つつも、佐藤は、箱を開けた。

「わあ、おいしそう」

嘘偽りのかけらも無い佐藤の歓声だった。

トリュフ型のチョコが3つ並んでいる。

「あの、お世話になったお店の人の分も作って、

それで材料が、あまり買えなくて、でも、あの・・・」

「ねえ、食べてもいいい？」

佐保の言葉など、耳に入らぬ様子で、佐藤はきいた。

期待で、瞳がきらめいている。

その表情に佐保は微笑んだ。

「どうぞ」

佐藤はチョコを口に入れ、しばらく無言だった。

佐保の緊張感が、高木たちに痛いほど伝わってくる。

佐藤の表情が、花のようにほころんだ。

「美味しいわ、このチョコ。すごいわ、佐保さん。

ほら、二人とも食べて見てごらんなさいよ」

差し出された箱の前に、高木と高野は同時に佐保の顔を見た。

佐保は、優しげに笑みを浮かべ、頷いた。

「どうぞ、お口に合えばうれしいのですが」

「合うわよ、絶対。こんな美味しいチョコ今まで食べた事無いわよ
ね」

二人は、口を動かしながら、佐藤の言葉に頷いた。

「よかった。美味しいと言って頂けて」

佐保は、佐藤の顔を、佐藤が決して気づく事の無い思いを込めた顔

で見つめた。

「私の夢は、食べた人が幸せになるようなお菓子を作る事なんです」
「その夢は、もうかなってるわよ。」

だって、私、さっきまで、仕事に押しつぶされそうだったけど、今は、すごく幸せだもの。

あんな、美味しいチョコ食べたら、誰だって幸せよ」
晴れやかに微笑む佐藤の表情を、

永遠に心の奥に刻み付けるかのように、佐保は、見た。

そして、深々と頭を下げ、別れを佐藤に告げた。

彼女は、見送る佐藤を決して振り返らなかった。

(Appendix)

1課へと続く廊下の途中、3人は、佐保の事を話しながら歩いていった。

「本当に、美味しかったわね、あのチョコ」

「ああ、確かに。だがオレたちには、ちっとばかりほろ苦かったよな、高木」

「そうですね」

高木は微笑んだ。

「え、苦かった？そんなこと無かった、

あ、まん中のチョコと、両端のチョコ、違う味だったのかしら。
残念、両方味わいたかったわ」

高野は、カラカラと声をあげて笑った。

その表情は、どこか寂しげだった。しばらく高野を見つめていた佐藤が聞いた。

「あの、もしかしたら高野さん・・・佐保さんのことが好き・・・
だったとか」

再び、高野は大声で笑った。笑いすぎて涙をぬぐいながら言った。

「それは、謎のまんまにしておくのが、花って言うもんよ。」

だがな、オレは本当は、いつも手の届かないものに憧れちまう

ロマンチストだってこたあ、覚えておいてくれよ。美和ちゃん」

佐藤は、しばらく考え込んでいたが言った。

「ねえ、高野さん。仕事が終わったら、飲みに行きましょうよ。佐保さんの門出を祝って」

「高木も、来るよな」

高野の言葉に、高木は答えた

「え、でも佐藤さんが誘ったのは、高野さん・・・」

「門出はだ、賑やかに祝ってやるもんなんだよ。で、美和ちゃんの分、割り勘な？」

「あら、おごつてもらえるの？」

「美和ちゃんの仕事の完成も祝ってやるよ。」

ほれ、ただ酒飲みたきゃあ、さつさと仕事」

佐藤は、笑うと、先に廊下を1課に向かって走り出した。

高木は高野を見た。高野も高木を見た。

二人の男は、微笑を交わし、佐藤のあとを歩いていった。

（おわり）

（後書き）

これも某サイト様に置いていただいたもの。

登場人物の名前を変えてます。

変え損ねた個所がありませんように・・・。

個人的には（Appendix）の個所が入っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5897b/>

あなたのために

2010年10月12日07時45分発行